

批評と紹介

物語・源氏物語研究の二著

日向 一 雅

研究の細分化細密化が進行する中では、『物語文学論』という書名じたい個別の作品研究の枠を越えるものとして斬新にひびく。そこに物語とは何か、物語の文学としての研究はいかにあるべきかというような設問が立てられる時、これは魅力的でさえある。関根賢司『物語文学論——源氏物語前後——』（桜楓社、昭和55年）を特色づけるものは、そのような物語への根源的な問いと研究方法を不断に更新してゆく姿勢、あるいはそうした覚悟を怠らないところにあるだろう。

氏は「あとがき」で本書について、「文献としての古典を、あらためて文学として捉えかえしてみようとする姿勢」で書いたとか、「物語文学というジャンルを自明の前提として研究したり考証したり鑑賞したりしたのではなく、物語を文学として論じようとしたものである」（253頁）と記すが、物語を文学として論じるという自明な当為も、単に理屈としてそうすべきであるからというのではなく、氏において自己の生を問うこととほとんど不可分の営みであったということであると思われる。本書冒頭の「京都にて——沖縄・国家・物語」という小文には、氏の物語研究への熱い思いとじしんの状況との不可分の関係が吐露されている。沖縄にあって沖縄に帰属しえず、本土にもまた帰属しえないなにかを自己の内部に棲まわせるようになったという氏は、みずからを「二重の異邦人」とよぶが、そのことがその異和感と緊張感をテコとして、「国家の呪縛の解体へ、物語の解体と再生へ、つまりはわが再生へと、僕の視点をみちびいていくかもしれない、という予感をいだかせもするのだ」（11頁）という。安易にふれることが憚られるようなこうしたことばに、氏の「物語を文学として論じようとした」ことの掛けがえのない意味が明らかであろう。みずからの生の状況と無縁なところで研究が自立するというようなありかたを氏は峻拒してきたのである。そしてそれは、ふりかえってみれば、戦後の古代物語研究の出発点において、「わたくしたちの人間について文学についての関心をぶっつけるところから、すべてが開始するのではなかろうか」（秋山虔『源氏物語の世界』5頁）と記されたことの今日的な継受であるといってよいはずだ。氏はまず戦後の研究の原点を確認したのである。

そのことは即ち戦後の研究が方法論を抜きにしてありえなかったという意味で、研究方法への不断の問いを問うこと、方法の更新や脱皮のための苦闘につきあうことで

あった。本書所収の1968年から80年までの諸論考には、氏における研究方法の更新とともにその苦闘がうかがえる。大まかな見当として1974年頃に一つの転機があるように思う。「狭衣物語の世界」「物語への傾き——枕草子の一側面」「大和物語の形成」「源氏物語と日本紀」がそれ以前の一つのまとまりをなしている。それらは随所に新鮮な着眼と着想をちりばめて説得的であるが、これ以後の仕事に照せば方法上の目新しさは格別ない。むしろそれらは国文学研究の方法を十全に体現した安定感をそなえていた。それらはぼくにとってなじみやすく安心して読める論考であった。

だが、氏はこれ以後おもむろに、ないし急激に変る。「一代記・懺悔・物語」は物語に一代記の構造を認め、物語史に懺悔の系譜をたどり、懺悔の思想に物語の本性を見いだそうとする。あるいはまた「かぐや姫とその裔」においては、「物語史の基底、物語史をつらぬくものをうかがい、物語そのものを問いなおしつづけるべきなのだ」(22頁)と考えるところから、異郷論、申し子譚、本生譚、等の話型に依りながら、「物語とは、なにか」と問い、「それは、[地上にうちすてられている人間を、彼岸からのまなざしがとらえる、という物語の構図のなかに、人間と世界とを越えようとする意志をつらぬいていく野望、あるいは悲願であった」(38頁)と説く。こうして「思想」や「話型」を媒介することによって、個々の作品を越えて物語をトータルにまた根源的に捉えようとするのであり、そのために「さまざまな視座とあらゆる方法とを動員する」(同上)ことの必要を力説する。これらが74年の論考であるが、このあたりから氏の方法意識がきわだってくるように思う。

このあとに陸續と書かれた源氏物語についての諸論は以前の「思想」や「話型」を踏まえながら、そこから離陸して、表現論あるいは氏の用語によれば表現機構論というような方法で書かれる。たとえば「源氏物語論の端緒」とすべく、「闇」の語を取りあげるについて次のようにいう。「いわば、言葉の分類学の次元から、ひとつの言葉が、文脈のなかで、どのように生きてはたらくか、また文脈を、どのように振じまげていくかを問うことによって、物語の不断の展開、飛翔と曲折の軌跡を追って、物語の構造を動的に読みぬいていく、表現の生態学へ向けての序説としたい」(129頁)。この表現(機構)論の方法によって氏は「狭衣物語の世界」以下の第1期の作品論に決別した、個別の作品論を再開する。

しかし、「ひとつの言葉が、文脈のなかで、どのように生きてはたらくか」と問う表現論は総じて文脈の精密な追体験以上に、どこまで自立した作品論となりえたか疑問なしとしない。たとえば更衣を殺したのは後宮の女たちのそねみ、恨み、なかんずく曹司を奪われたもう一人の更衣の恨みであったことを確認した上で、氏は『その恨み、ましてやらむかたなし』というセンテンス、物語の言語が更衣を絶命させた、「言葉が更衣を殺したのだ」(161頁)という。同様に、更衣の死の遠因、は「家の意志であり、家の意志を封じこめた遺言という呪的な言葉であった。ここでも、言葉が、殺したのだ、とすることができであろう」(162頁)という。「言葉が更衣を殺した」といっ

ても地の文と遺言とではその言葉の意味がちがうはずだから、このように抽象して一つにくくることがまず疑問であるが、それはともかくこういう言いかたは比喻としてであれ、個々の言葉の自立を絶対化する論理である。いわば現代の言魂論であろう。作品は究極ではそれじたいで自立した世界であり、『自律的な言葉がそれじたいの自律的な論理に従って固有の表現世界を築くことこそ完璧な表現の理念にほかならないはずだから、作品としての表現世界の自立性はそれじたいを対象として論じられるべきで、安易に作家を介入させるべきでないのは作品論の鉄則である。だから氏が言葉の論理に忠実であり、そこに作家を持ちこまないのは正当であるけれど、言葉が更衣を殺したというように、あるいは似たような言いかたをすれば、言葉が存在を決定するというように命題化して、個々の言葉の自立性を絶対化することは、作品としての表現世界の自立性を問うことと位相が違うのではなかろうか。個々の言葉の水準は更衣を死に追いやるなら追いやるで、寄ってたかってそうした物語の論理を組成していくのであるはずだから、問題はそうした物語の論理を表現の構造として明らかにすることなのであると思う。

氏は同じ論文の中で次のような言いかたもしていた。「藤壺——さやうならむ人——思ふやうならむ人、と、言葉が転位され、転位された言葉が、新たなる女主人公たちをはげしく喚んでいるのだ。物語の展開をつきうごかしていくもの、物語の長篇化の契機は、桐壺の更衣——藤壺——X——X'、という紫の花々のゆかりの人脈、系譜であるとともに、ひとつの言葉がつぎつぎに言葉たちを喚んでいく、言葉の連繫、文脈でもあった」(167頁)。いわれるように源氏物語においては言葉が言葉をよぶという自律的な論理が文脈を形成するが、問題は言葉の「転位」そのことの指摘ではなく、「転位」の構造を問うこと、言葉の「転生」による物語の飛翔を論ずる(169頁)場合においても、「転生」の構造が論理化されることが求められていたのであろう。氏はまさにそうした「表現機構」を明らかにすることを目ざしたのだが、勝手な印象をいえば十分な論理化がなされたとはいえないように思う。

「竹取物語序説——作者の誕生と死と」「伊勢物語序説——第125段を読む」は、氏の作品論の方法の今日的な到達であろう。そこでは作品の中に作者のありかを問う方法を提起していると思われる。あるいは作品論と作家論的方法的な止揚をめざしたのであろう。自立した言葉の「転位」や「転生」を論じた段階からの、これはさらなる脱出であり、「転位」の方法論への反省であったといってよいのかもしれない。「作品が読まれるとは、読者によってそのつど作品が新たに書かれていくということだったのではないか。とするならば、つまり、作者と読者とのほざまに、作品は成立し、書くことと読むこととのあわいにこそ、作品はあるのだ、とするならば、作品論あるいは作家論のありかた(傍点原文)が問題だったのだ。(中略)作者は、作品のどこに、あるか、と問うべきだったのである。作者のありか、作者の〈書くこと〉の軌跡を、作品のなかに、読者の〈読むこと〉のなかに、テキスト空間の経験のなかに、現前させ、

定位させるべきだったのだ」(60～61頁)。これはいわれるとおりであると思う。問題は、ないし困難はこうした方法論を具体的な作品論としていかに結実させるかということにかかっている。氏はみずから方法論を作りあげてきたが、それが個別作品論の十分な成果にはまだ直結していないというのが率直な感想である。

林田孝和氏『源氏物語の発想』(桜楓社、昭55年)は関根氏に方法論の先行があるとすれば、対蹠的に師説の方法を忠実に継承しつつ、一貫して源氏物語の表現の発想形式を問うところに特色がある。「あとがき」に「どんな作品もその〈時代の子〉である。それゆえ(中略)その時代に立脚した作品固有の表現世界の論理のあり方が追尋されなければならない。本書はそうした『源氏物語』の有する固有の表現論理を、主に民俗学的方法によって闡明しようとする試みの論である」(301頁)とあるが、この一文に林田氏の方法の要点は尽されているであろう。

全体を4編に分かつが、第1編「源氏物語の発想と自然環境」では、「月光」「ながめ」「あらし」という物語の自然環境がいかに民俗信仰と深くかかわるか、それによって登場人物や場面の内的な必然性が組織されることを論じる。源氏物語の男女の語らいの場面に月光が設定されるのは、神来臨とそれをいつくものという日本人の月に関する信仰理念が、連綿と継承されていたからだ(40頁)といい、「月」を名にもつ朧月夜は「遠来の客人を待ちいつき款待するいつきめ——〈月女〉そのもの」(42頁)であり、かの女は〈神の子〉光源氏を齎すべく登場した女であるからして、密事は必至であった(44頁)というのである。「ながめ」については、「雨夜に禁欲生活を強いる長雨忌みの信仰習俗」(66頁)を基本的に確認しなければならないとした上で、その変遷推移を「ながめ」文学として脈絡づける。「あらし」は具体的には「須磨のあらし」のことであるが、その天変は神霊の示現であること、またあらしは雨水による清めを意味したことを明らかにする。おそらくここで指摘されたことは原則的に承認されるべきことであるにちがいない。

第2編は「祭儀と源氏物語の世界」と題して、「末摘花物語の『笑い』の形成」以下二つの論考から成る。この「末摘花」論は迫力がある。まず氏は末摘花には笑いと陰惨がつきまとうといい、その由来をたずねて、「ひなつ女物語」の系譜の上に位置づける(134頁)ことで、かの女の陰惨を説明し、他方笑いの方は末摘花が「笑いの祭儀」鎮魂祭における〈冬の女〉であり、かつ〈山人〉の資性をもつ(145～8頁)ことから説明する。「笑いの祭儀における冬の女の位置におかれた末摘花は、彼女の醸す笑いによって、春の女神を目醒めさせその笑みを誘う」(156頁)役割を受持つのであり、そこに同時に、「王朝一般の女性たちとは異質の、宮中の鎮魂祭などの神事芸能にたずさわる女性の姿が、疑いもなく纏綿している」(154頁)と論じる。末摘花は「そのまま見捨ててしまえば、どのような祟りをもたらすかわからぬ畏怖さるべき呪力を有した〈ひなつ女〉のひとりであった」(156頁)。これは末摘花の構造論として説得的であると思う。

だが、ここから進んで「末摘花物語は“呪詛の文学”」(160頁)、「落魄の貴族たちの呪詛や呻吟を、末摘花物語に形象し、しかも彼女を、人々のあくない笑いの対象として造型し、抹殺してゆく。この物語作者の非情冷徹な筆鋒とその豊かな構想力とは、現代作家に比べても、優るとも劣るものではなかろう」(161頁)というふうに論じられる点には、若干の疑問もわく。「呪詛の文学」というからには、どのような「呪詛」が形象されていたか検証の要があるのではないか。氏の明らかにしたような背景をもつ末摘花の物語と「呪詛の文学」ということとの間には飛躍があるように思うのである。これは蛇足であるが、「作者の非情冷徹な筆鋒」はともかく、どうしてここで現代作家との比較に言及しなければならないのか。この論旨では言及の必然性は乏しいのではないか。時々こういう言いかたがあるのが気になった。

第3編「靈魂信仰よりみた物語形象の論」は「火の呪能」「目の呪能」等、はっとさせられる指摘がある。桐壺巻、帝が亡き更衣を追慕して、「ともし火をかかげつくりて、起きおはします」という、「この燈火は、亡き桐壺更衣の靈を呼ぶ火——招魂の迎え火ではなかったか」(211頁)といい、同じ巻で更衣の死を悼む段は、「更衣の死靈慰撫を目的に据えた鎮魂の詞章」であり、「読者も辟易するほどの鎮魂の礼をとらなければ、更衣の死靈がいつ物語に再登場するかわからない」(234頁)という。あるいはまた女三宮の母の藤壺女御は、女三宮の将来の保証をとりつけようとして自殺した(236頁)等々。藤壺女御自殺説には疑問があるが、他は承認されるべきことであろう。

第4編「浮舟物語発生史論」、ここでは浮舟を「贖罪の女君」として明快に位置づけた点は敬服するのであるけれど、その「贖罪」について、浮舟は「光源氏その人の形代ではないか」(292頁)といい、「浮舟物語を光源氏や紫式部の“贖罪の物語”として位置づける」(298頁)というふうに説くところには疑義を覚える。なぜそうなるのか、その論理が必ずしも十分に展開されているとは思えないからである。

林田氏の諸論は源氏物語がその発想の基底に伝統的な民俗をひきずるだけでなく、それを文学的な遺産として引継ぎ、それに規制されるかたちをあざやかに照射してみせてくれたが、そこから離陸して達成された世界をどう捉えるかという視点は、さらに別様に考えられなければならないのであろう。関根氏の方法がその時有効となるであろう。その際、表現論や構造論の方法に民俗学的方法の成果を積極的に媒介する方法が考えられてよいのだと思う。対蹠的な両氏の仕事であるが、自分の糧とすべく感じたままを記してみた。理解の到らないままの妄言など非礼にわたるところはお許し願いたい。